

蘇州日本人学校における日本語事情

—海外子女をとりまく日本語のバリエーション—

梶村知美・林 伸一

1. はじめに

日本語教育の分野では、年少者の日本語習得というテーマで主として外国人児童・生徒の日本語習得の調査・研究が報告されてきた。松本（1999）は、中国人児童の来日一年間の語彙習得について調査している。また、須藤（2000）は、小学校での外国人子女教育について実践報告している。そのほかの調査・研究も日本社会に受け入れた外国人年少者や日本人の帰国子女が対象となっており、日本人の海外子女を対象とする調査・研究は少ない。海外子女教育財団においても、海外子女教育の実態が蓄積され、公開されている訳ではない。その理由としては、海外の日本語補習校や日本人学校の児童・生徒の日本語の問題は、日本語教育というよりは、むしろ国語教育の問題であるとの縄張り意識が働いているためであろう。

しかし、海外子女は、異文化環境の中で日本語教育の問題に直面しており、帰国子女問題のルーツでもある。藤森他（2006）は日本語教育の視点から、日本人学校・補習授業校における日本語指導の現状と課題について調査し、報告をしている。

日本語教育の側は、その独自性を発揮し、内外にアピールするために国語教育との相異を強調し、同じ「日本語」という教育素材を共有しているのに、残念ながらあまり相互浸透が図られてこなかった。清田（2001）は、教科としての「国語」と日本語教育を統合した内容重視のアプローチを用いて、中学生（外国人生徒2名）を対象に実践し、報告している。母語教育としての国語教育と外国語としての日本語教育という区分は、双方の専門性を高める上では重要であるが、「日本語」という対象の共有と教育方法論の共有化作業を通して両分野のそれぞれの発展も期待されると思われる。

日本人児童生徒が国内であっても転校すれば、新しい学校文化（school culture）に馴染み、新しい学校生活を送ることに困難を感じる場合がある。その要因の一つに言葉の違いがある。地域方言の違いは元より、同じ地域の転校であっても、違和感を覚えることがある。それはそれぞれの学校の用語、教師が使う言葉、生徒が使う言葉に独自性があるためだと考えられる。

たとえば歌詞の1番・2番のことを一題目、二題目（だいめ）と呼ぶ地域があることが北陸中日新聞の記事（2004年5月16日付）に見られる。そこには「『何題目』の

表現を使っているのは石川、富山両県のみ。明治以降、教育現場から市民に広まっていった金沢特有の『教育方言』とみる」とある。

海外の日本人学校は、帰国後、日本の学校に問題なく編入できるようにするために、文部科学省の学習指導要領に基づいた教育を行う学校であるとされている。しかし、近年国際結婚の増加で家庭内では日本語以外の言語を使用している者、保護者が日本人であっても、小学校就学以前から現地の幼稚園に通っていた経験を持つ児童が多い。藤森他（2006）によると、日本人学校における日本語指導が必要な児童生徒数は185名で、全体の3.8%に当たるとしている。蘇州日本人学校では2名の児童が取り出し授業を受けている。今後、日本語指導の必要な児童生徒数の増加が予測される。

情報化社会の発展に伴い、日本のテレビ番組やインターネットなどを通して日本の情報は海外でも容易に入手できる。たとえば中国では、日本の衛星放送をNHKのほかにも、7～8チャンネル見られ、地上波の放送でもテレビ番組やドラマなどが、あまり時間差を置かずにDVDなどを通して見ることができる。ただ、海外の日本人社会はさまざまな地域から来た人が集まるため、日本語が共通語化されやすい反面、独自の言葉も生まれやすい環境にあると考えられる。本稿では、蘇州日本人学校をサンプル調査の対象として選定し、海外子女をとりまく日本語のバリエーションを調査し、検討内容を報告する。

2. 蘇州日本人学校について

蘇州日本人学校は2005年に蘇州日本人補習授業校から、日本人学校に昇格した開校3年目の新設校である。同校は、蘇州日商倶楽部が設置した中国政府の認可を得た私立学校で、2006年度は文部科学省派遣の教員9名と現地採用教員6名が教育に当たっている。

蘇州市は上海から電車で一時間ほどの長江デルタ地域に位置し、日系企業の参入が盛んなところである。JETRO（日本貿易振興機構）によると、2005年3月に蘇州にある日系企業数は429社となっている。また蘇州近郊の無錫市にも200社あまりの日系企業がある。無錫市にも日本語補習授業校が2006年4月に開校された。（詳細は根村・林2007参照）

また、蘇州日本人学校は、中国の日本人学校の中でも児童生徒数の増加が著しい学校である。2005年4月には63名だった児童生徒数も、開校初年度の2学期には100名を越え、2007年11月現在では251名の児童生徒が在籍している。約4倍の増加である。原則として、1クラス31人以上の場合2クラス編成にし、少人数教育を実践している。同校は、設立間もないため学校ことば（学校方言）が確立していないと考え、

本調査に臨んだ。

3. 「学校方言」と「生徒方言」の定義

梶村・林 (2005) は、いわゆる「学校ことば」を「学校方言」と「生徒方言」に区分し、次のように定義している。

【学校方言】主に学校社会における「学校文化」に属する語で、学校社会において教員など学校関係者によって用いられ、学校社会以外では一般的には用いられない言葉である。

【生徒方言】「生徒文化」に属する語で、主に小・中学生や高校生・大学生また20代くらいまでの若年層に使用がみられる。子ども同士では使用するが教師に対しては使用しないため、教師集団が知らない場合も多い。

また、梶村・林 (2005) は学校方言と生徒方言を次の表1のように例示している。

表1. 学校方言と生徒方言の例

学校方言	特活（特別活動）・いろいろ楽器（鍵盤ハーモニカ・リコーダー以外の楽器）・朝学（始業前に勉強すること）・自学（教師が宿題を出さず、子どもが自主学習をする）・漢ド（漢字ドリル・注1）・原籍校（本来在籍する小・中学校）
生徒方言	先公（教師のこと）・内職（授業中自分の用事をする）・置き勉（教科書を学校において帰ること）・早弁（昼食時間より早く弁当を食べること）・カンベ（カンニングペーパー）・無視る（無視する）・イキる（意気がる・調子にのる）

表1の「カンベ」などは、学校以外のテレビ関係者などにも拡大使用されている。

（注1）「漢字ドリル」と「計算ドリル」のことを岐阜県では全県的に「カド・ケド」が一般的であると、山田 (2007) が地図上でそのバリエーションを示す形で、調査報告している。

また、山田 (2007) は、学校単位でほぼ同じ語形を使うことが期待される語として、「上靴」と「上履き」、「黒板消し」と「黒板ふき」、「筆入れ」と「ペンケース」、「チョーク」と「白墨」などを挙げている。

本稿では上記の「学校方言」「生徒方言」に加え、教師集団が使用している言葉を「教師方言」とする。山田 (2007) も教室での活動として「班（グループ）内で意見を自由に言い合い確認する作業」が、岐阜県では「班交流」ということばで表現され

ているとしている。教師方言の例である。低学年向け教科書に分かりやすく言い換えられている言葉で、一般的には、あまり用いられていないような言い方を「教科書方言」と定義づける。

4. 調査の目的

藤森他（2006）は日本人学校日本語担当教員に行ったアンケート結果として「日本での教育歴は10年以上が73%で、日本の初等・中等教育専門家としてはベテランぞろいである。一方、『外国人に教えるための日本語教育に関する研修の有無』については、回答教員の89%が日本語教育に関する研修を受けたことがないまま、日本語指導を必要とする児童生徒の指導に直面している」としている。

蘇州日本人学校では、編入学前に入学面接を行っている。主に日本語の習得状況、国語力を見るものである。日本語の会話力があれば、授業についていくのに支障がないと評価されがちである。しかし、Cummins（1984）の指摘するB I C S（Basic Interpersonal Communicative Skills、伝達言語能力）とCALP（Cognitive Academic Language Proficiency、学力言語能力）の違いは顕著である。BICSとCALPの関係は、自然言語とメタ言語の関係に重なることも多く、特にCALPは年齢相応のレベルに至るには5～7年かかると報告されている。現地の幼稚園に通い、家庭内でも日本語と中国語を併用している環境にある子どもは、一概に日本語能力が高いとは言い難い。さらに、学校は日常会話では使用されず、辞書に掲載されにくい「学校方言」「生徒方言」「教科書方言」といった言葉が存在し、途中で編入してきた児童・生徒には理解し難い。日本人学校の教師はどのような言葉を使用しているのか、生徒はどのような若者言葉を使用しているのかを調査し、国語教科書にみる教科書方言を含むCALPを抽出してみることにした。

5. 調査領域と調査方法

本報告での調査領域と調査方法は以下の通りである。

- (ア) 蘇州日本人学校における教師方言（教師集団語）に関する聞き取り調査
- (イ) 国語の教科書における教育方言（メタ言語、CALP）の採取
- (ウ) 生徒が使用する若者言葉（若者語）について、アンケート（質問紙法）調査

6. 調査結果

6-1 蘇州日本人学校の教師方言

蘇州日本人学校で教師集団が実際に使用している教師方言に属する言葉を以下の表

2に示す。

表2. 蘇州日本人学校における教師方言（教師集団語）

教師方言	意味内容
国内	日本国内のこと（中国で用いられても、中国国内の意味にはならない）。
派遣	文部科学省から派遣された教員。
現採	現地で採用された教員。ここでは、蘇州日本人学校に直接採用された教員。
財団	海外子女教育財団のこと。正式には、財団法人海外子女教育振興財団。
編入	日本国内での転校は転入を使うが、日本人学校は編入学という。
運営委員会	蘇州日本人学校の運営に当たっている組織。日本国内のPTAの運営委員会などとは異なり、私立の学校経営にあたる実質的な運営組織。
運営委員長	文部科学省から派遣された校長の他に、学校を運営する運営委員長が管理職としておかれている。
SS	Suzhou Singapore International Schoolの略。蘇州市内にある、シンガポール系のインターナショナルスクール。この学校からの編入者が多い。通常頭文字をとり「SSIS」と言われているが、さらに省略された形。
外語(がいご)	蘇州市内にある現地校、蘇州外国語学校の略。
担外	担任外の教員のこと。
学部会	小学部所属の教員と中学部所属の教員がそれぞれ学部内で行なう会議。
終礼	蘇州日本人学校で子供の帰宅後に伝達事項を確認する会議。
事前研	他の教員も参観する研究授業を行う際、授業者と数名の教員で事前に授業について行なう研修。
事後研	研究授業が行われた後の研修。
学校読み	ゆっくりとした節をつけて語尾を強める音読のしかた。
普通読み	学校読みに対する語で、一般的な普通の音読のしかた。
共通課題	一つの単元を進めていく際に、共通の目標をもって取り組む課題。
P	P T A (Parent-Teacher Association) の略。
発育二測定	身長・体重のみの測定。

「派遣」「現採」「財団」「運営委員会」といった言葉は日本人学校独自の用語だと考えられる。「学部会」とあるが、同一学校内に小学部と中学部が併設されているために使用されている。また「SS」「外語」は蘇州日本人学校に近接する学校であるため、他の日本人学校では使用されていない地域方言のようなものと考えられる。「教師方言」は教師集団の内部で通じる集団語と考えられる。そのため、「校内研修」や「机間指導」または「机間巡視」のようにどの学校に転勤しても教師集団内では使用されるものもあれば、地域や学校が異なれば使用されないものもある。

6-2 小学校の国語教科における教科書方言

小学校の国語教科書が子供の発達段階に応じてどのような記述になっているのか明らかにしていく。調査対象とした教科書は、下記の通り。

宮地裕ほか (2006)『小学校国語科用 こくご一 (上・下)』光村図書出版株式会社

宮地裕ほか (2006)『小学校国語科用 こくご二 (上・下)』光村図書出版株式会社

宮地裕ほか (2006)『小学校国語科用 こくご五 (上・下)』光村図書出版株式会社

6-2-1 小学校1年生の国語教科における教科書方言

表3. 小学校1年生 (下) における教科書方言

教科書方言	意味	小学校1年生 (上) においては、句点のことを「まる」とする一語のみであった。小学校1年生の入門期の段階では、絵が大半を占め、ほとんど文字がない。だいたい10月から使用をはじめ (下) の教科書になると、教科書方言が現われ、児童が理解しやすいように言い換えられている。自然言語で専門用語 (メタ言語) を説明しようとする試みであるが、厳密には表3の中の「長音」なのか「母音の連続」なのか議論の分かれるものも含まれている。
お話をつくった人。	作者	
のばすおんのかきかた。 例) ハンバーグ⇔おばあさん	長音⇔母音の連続	
ちいさくかくかな。 例) カップ⇔かっぱ 例) ジングル⇔じゃんけん	促音 拗音	
おはなしに出てくる人。	登場人物	

する試みであるが、厳密には表3の中の「長音」なのか「母音の連続」なのか議論の分かれるものも含まれている。

6-2-2 小学校2年生の国語教科における教科書方言

表4. 小学校2年生（上・下）における教科書方言

教科書方言	意味
「なぜ」「どうして」は、「わけ」をたずねることば。	理由
「木、村、休」は「同じ部分」をもつ漢字。	へん、つくり
上の学年のおにいさん、おねえさん。	上級生
丸（。）は文の終わりにつけます。	句点
点（、）は、文の中の切れ目にうちます。	読点
人の話したことば（会話）はかぎ（「かぎ」）をつけて、行をかえます。	会話・引用符
会話ではないところ。	地の文
外国から来たことば。	外来語
音をあらわすことば。	擬音語
ようすをあらわすことば。	擬態語
小さく書く字（や、ゆ、よ、つ）。	拗音・促音
たとえのことば。	比喩
あいうえおじゅん。	50音順

小学校2年生は1年生と比べて教科書方言（メタ言語）が増えている。小学校1年生の後半から小学校2年生にかけて専門用語を子ども向けに分かりやすく説明するメタ言語が多く現れると考えられる。また教科書方言は、文学教材や説明文の教材など「読むこと」の単位ではなく「書くこと」や「言語事項」にあたる単元に多く使用されている。

6-2-3 小学校5年生の国語教科書（光村）との比較

「のばす音」（長音）の1語のみであった。教科書方言は小学校低学年に多く使用され、5・6年の高学年になると急激に使用されなくなることが分かる。前述のCummins（1984）のCALPは年齢相応のレベルに至るには5～7年かかるとの報告に符合すると思われる。

6-3 蘇州の日本人社会で生活する中学生の若者言葉の使用実態

日本人学校に通う中学生は日本国内の中学生に比べ、若者言葉に接する機会が少ないように思われる。さらに家庭内では日本語以外の言語を使用している生徒や、日本に十年以上居住していない生徒もいる。日本の各地から中学生が集まっているため、いわゆる地域方言に接触する機会が多く、興味を抱いている生徒が多い。そのことが

自分の使用言語に対する興味を持たせているように思われる。本調査が、国語の時間に若者言葉について考える授業を設定した。若者言葉は中学生にとって身近な話題であると考えられたからである。

光村図書出版の2006年度版国語教科書においても、中学1年生で「言葉を探検する」という単元の中に外国人にとって日本語のどんなところが難しいか、流行語はどうやって生まれるかという問題提起が含まれている。中学2年生では「方言と共通語」という単元がある。中学3年生ではパネルディスカッションのテーマ例として「若者言葉の是非」が挙げられている。以下に海外子女が若者言葉をどのように捉え、どの程度使用しているのかを明らかにしていく。

6-3-1 海外子女の若者言葉の使用実態

米川（1997）は若者言葉を「若者語」として次のように定義している。「若者語」は、中学生から30歳前後の男女が仲間内で、会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠蔽・緩衝・浄化などのために使う、規範からの自由と遊びを特徴に持つ特有の語や言い回しである。個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。また時代によっても違う。

本稿では次の点を明らかにしていく。①蘇州日本人学校の中学生は、若者言葉をどの程度使用しているか。②蘇州日本人学校独自の若者言葉にはどのようなものがあるか。

6-3-2 調査・分析

中学部全学年34名（男子16名、女子18名）に対し、2006年10月中旬に若者言葉に対する課題を与えた。佐竹（2004）の『日本語あれこれ事典』に出ている「『きもい』はなぜ『気持ちいい』ではなく『気持ち悪い』なのですか？」という課題である。この題材を選んだ理由として、普段の中学生の会話から「きもい」という言葉をよく耳にするからである。たとえば、ちょっとバス酔いをしてしまい、気分が悪くなった時や、掃除の時間に虫を見つけた時などに使用している。配布したプリントには題材と以下の課題を添付した。

- (1) 「きもい」という言葉の使用の有無。
- (2) 文章中の「きしょい」など若者言葉の使用の有無。
- (3) この文章を読み、感じたこと・考えたことなどを、普段の自分の言葉を振り返りながら書く。

次に『日本語あれこれ事典』からの抜粋を示す。

なぜ「気持ちいい」に対してではなく、「気持ち悪い」に対して「きもい」が発生するのかということであろう。

「きもい」はいわゆる若者ことばと言われるものの一つである。若者ことばでは「〇〇い」という形で造語されたものを挙げると、次のようなものがある。

きしょい（気色悪い）・けばい（けばけばしい）・めんどい（めんどくさい）・むずい（むずかしい）・うっとい（うっとうしい）・しょぼい（しょぼくれている）・はずい（はずかしい）・もさい（もさっとしている）・ちゃらい（ちゃらちゃらしている）・エロい（エロティックな）・グロい（グロテスクな）

（注）「きもい」から「グロい」までの12語について使用語彙なのか、理解語彙なのかを質問紙法で答えさせた。

6-3-3 若者言葉の使用実態

前述した佐竹（2004）に示された12語に、質問紙に使用する場合は○印、使わないが聞いたことがある場合には△印を付し、聞いたことがない場合は無印とした。若者言葉についての使用と認知に関する調査結果を次の図1にグラフで示す。

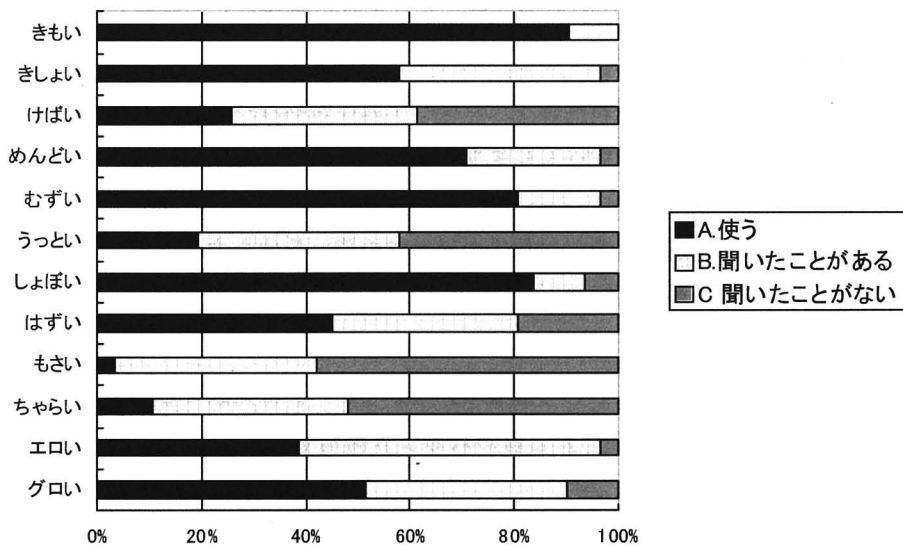


図1 日本人学校の若者言葉使用実態

①蘇州日本人学校の中学生は、若者言葉をどの程度使用しているか

調査の結果使用率が80%以上の語は「きもい」「むずい」「しょぼい」の三語であった。

中3女子aは「『きもい』や『うざい』などの言葉を、昔友達が無気なく使っていたのに影響されて、私も使い始めました。なぜそうしたのかなどは、気にもとめたことがありませんでした。今ではもう『気色悪い』『けばけばしい』などの標準語を使うことの方が抵抗を感じます」と記述している。生徒が若者言葉を自然習得していることがわかる。

中3男子bは「『きもい』『めんどい』などと言う事はもはや日常茶飯事である。ましてや『気持ち悪い』などと言われるほうが傷ついてしまう」と記述している。この生徒は小学校5年生の時から台湾で生活して、日本人学校間の転校生であるが、長く海外生活を送っている児童・生徒にも若者言葉が浸透していることを示している。

中3女子cは「最近よく『きもい』などのことばは良くないから使わないようにと注意されるが、わたしはどうしても直せない」としている。保護者等からは使用を注意されているが、元の省略されない言葉を使用する方に抵抗を感じている様子が窺える。

また中3女子dは「人にも『きもい』や『きしょい』などという言葉は自然と発していることもあった。だが実際に人にそのようなことばを言われて傷ついている子供も少なくはない。最近おこった事件の一つには、まさにこの若者言葉につながるものである。小学6年生の女の子が自殺してしまった事件だ」と記述している。最近の子供の自殺のニュースが強く印象に残っているようである。この事件でも言葉による中傷が相手を傷つけ、自殺に至った。この生徒は物以外の人にも「きもい」などを使用しており、人を深く傷つけてしまうこともあるという言葉のもつ威力にも認識が及んでいる。

中学3年生では、「若者言葉」は相手や場面での使い分けをすれば使用してもいいと思うという意見が多数を占めた。しかし中学2年生・中学1年生と学年が下がるにつれ、若者言葉を使用すべきではないという意見が目立った。

中2女子eは「特に『うざい』『きもい』『きしょい』は冗談でも言われたくない言葉です。普通に『気持ち悪い』と言われるより何倍も傷つきます」と記述している。

中1女子fは「もし人から『お前、しょほい』と言われたとすると、とても傷つくだろう。でも、『お前、しょぼくれている』と言われた方が最初よりもあまり傷つかない、だから最近使われている省略語はとても相手を傷つけてしまう」と記述している。この二人の記述に見られるように、中学3年生では「気持ち悪い」と言われた方が「きもい」より傷つくという意見があったのに対し、中学1・2年生では「きもい」や「しょほい」と若者言葉と言われるほうが傷つくという意見だった。

小学校4年生からインターナショナルスクールに通っていた中1男子gは、「よくクラスの中で何人かが集まって小さな声で『きしょい』や『キモイ』などと言っていることをよく聞きます。自分のことを言われているのかと思い、とても嫌な気持ちになったこともありました」と記述している。インターナショナルスクールに通っていたため、「今まで自分はあまり若者言葉を使ったことがなかった」としている。しかし「小学生のときは時々『むずい』という言葉を使ったことがありました。この言葉は相手にいやな気持ちをあたえるものではありませんが、正確な言葉を使わなければ将来言葉遣いが悪い大人になってしまうので、これからは若者言葉を使わないように気をつけたいです」と記述している。

中学1・2年生はまだ若者言葉を使用し始めて間もない年齢である。そのため、若者言葉に対する抵抗があるのかもしれない。もしくは、「使い分けをする」という考えまでには至っておらず、正しい日本語を使わなければならないという意識が強いのかもかもしれない。

②蘇州日本人学校独自の若者言葉にはどのようなものがあるか

中学2年生9人に友達には方言を使うのか共通語を使うのかと尋ねたところ7人の生徒が共通語を使うと答えている。友達にもなるべく共通語で話そうとしている姿勢が窺える。だが、日本語と中国語の発音を混交させて用いている例が見られる。教師集団は前述したように「蘇州外国語学校」の省略「外語」を[gaigo]と発音しているが、生徒集団は[waigo]と言っている。「外語[waigo]に入ったら、夜9時まで学校がある」のように使用している。[wai]は中国語読みで[go]は日本語読みをした混交現象で、一種の混種語と言えるかもしれない。

また友達同士では「ありがとう」を「謝謝(シェシェ)」と言ったり、持っているのか持っていないのか尋ねるとき「有没有(ヨウメイヨウ)?」と言っているのを耳にする。中国語が選択科目として履修できることも関係しているであろうが、日本語の文脈の中で中国語を使うことにより日本人学校の仲間内での連帯感を高めているのではないだろうか。

文字表記においても漢字テストで、中国語の漢字を書いて誤りとされることがある。たとえば、「郵便」を「郵便」と書いたり、「調査」を「調査」、「筆」を「笔」と書いている。中国語の簡体字は、日本の漢字に比べて画数も少なく、書きやすいという特徴がある。生徒が似たような漢字であるために間違ったという場合もあるだろうが、「気色悪い」が「きしょい」と短縮される若者言葉の簡略化傾向と似た使われ方の側面もあると思われる。

7. 考察と今後の課題

以上、見てきたことは社会言語学の観点から、学校方言、教師方言、教科書方言、教育方言、生徒方言、若者言葉など社会方言としてまとめることができるであろう。

山田(2007)は、「方言が、伝統的な語彙だけに限ったものではなく、現代においても、若い世代には若い世代なりの方言があることはすでに説明する必要がないであろう」としている。今後、学校方言、教師方言、教科書方言、教育方言、生徒方言などという区分とネーミングでのきめ細かい調査と研究が望まれるところである。

また、BICSとCALPの関係は、自然言語とメタ言語の関係に重なることも多く、海外子女をとりまく日本語のバリエーションは多様で複雑な様相を呈している。外国人の年少者がなかなか日本の学校文化(school culture)に馴染めず、不適応を起こしている例が報告されている。そもそも日本の学校社会自体、かかえる言語のバリエーションが複雑で多様な領域に関係していることが、本稿の調査からも類推されるのではないかと思われる。

本稿は、蘇州日本人学校という新設されたばかりの学校で、日本人学校の中でも小規模校でのサンプル調査を開示した形となった。たとえば、近くの上海日本人学校は歴史も古く、児童・生徒数が2500名(2007年現在)を超える世界一の大規模校であり、その歴史と学校規模の違いから、異なる調査結果も得られるであろう。

蘇州日本人学校で使われている学校方言は、日本国内の学校では使用されているのか、また日本国内でも地域によって使用される学校方言などの言葉に違いがあるのではないかということ、今後アンケート調査を行い、分析検討していきたいと思う。藤森他(2006)の調査では、日本人学校において日本語指導が必要であると認識するときとして、①国語の教科書がすらすら読めない、②授業内容の説明が分からない、③授業中に日本語以外の言語で話すなどの例が示されている。蘇州日本人学校においても国語の授業に力を入れて、授業時数を多く設定したり、少人数教育で対応しているが、時間数や教員数だけではカバーしきれない内容的な問題が多く含まれているように思われる。

同校は、開校3年目で児童生徒数が251名と小規模ながら図書室の蔵書は、約15000冊と恵まれた環境にある。日本国内でも800人規模の学校に6000冊しか図書がない場合もあるのと比べると桁違いである。図書の充実は、海外子女教育に大きく貢献するだろう。

また、今後の課題として、年少者向けの日本語教科書と国語教科書の記述にどのような違いがあるのか調べることにより、日本語教育と国語教育の連携を模索していきたい。今回は一教科書会社の調査に留まったが、今後は複数の教科書会社の調査を実

施したい。

【参考文献】

- Cummins, J. (1984) *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. Clevedon, England : Multilingual Matters.
- 清田淳子 (2001) 「教科としての『国語』と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み」『日本語教育』111号、pp. 76-85
- 佐竹秀雄 (2004) 「きもい」宮地裕他監修『日本語あれこれ事典』明治書院 pp.150-151
- 梶村知美・林伸一 (2005) 「『はみご』類の社会言語学的考察～使用実態調査と分析～」山口大学文学会『山口大学文学会志』第55号、pp. 141-162
- 梶村知美・林伸一 (2007) 「日本人学校の中学生と日本国内の中学生の価値観比較～『ほめる』『ほめられる』アンケート調査より～」『山口大学文学会志』第57号、pp.55-70
- 須藤とみゑ (2000) 「外国人子女教育実践報告」『日本語教育』105号、pp. 138-141
- 藤森弘子・柏崎雅世・中村彰・伊東祐郎 (2006) 「日本人学校・補習授業校における日本語指導の現状と課題」『日本語教育』128号 pp. 80-89
- 松本恭子 (1999) 「ある中国人児童の来日1年間の語彙習得」『日本語教育』102号
- 山田敏弘 (2007) 「岐阜・愛知の若年層方言について1—遊びことば・学校ことば・オノマトペ—」『岐阜大学教育学部研究報告=人文学部=』第56巻1号pp.11-41
- 米川明彦 (1997) 『若者ことば辞典』東京堂出版